

飛鳥

2015年

冬号

第 185 号

かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所

飛鳥出版室

発行人 永野 正将

〒780-0945 高知市本宮町65-6

電話 088-850-0588

e-mail:info@asuka-net.jp

http://www.asuka-net.jp



於 高知八幡宮

謹んで新年のお慶びを申し上げます

新しい年の始まりには、誰もが平穏太平な一年を願っています。昨年は各地で様々な天災にみまわれた一年となりました。2015年が皆様にとって健やかで実りあるものとなりますように。

本年も株式会社飛鳥並びに「飛鳥かわら版」をよろしくお願い申し上げます。

ご挨拶	2
お正月のこと	千 晴 3
あすへの歩跡 4	大澤重人 4
キルギスタンからコンニチハ	氏原名美 5
おのころじま奮染記 3	田島征彦 6
文章力レベルアップ講座	水木和香 7
反戦青年の死	馴田正満 8
催し物案内板	9
飛鳥の社窓から	10
わが家の太郎	永野雅子 12

「いろいろかいろ」はお休みします

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

ご挨拶

新年あけましておめでとうございます。
最近、年末年始の実感が薄くなってきました。歳を重ね自身の主観が変わってきたのか、ゆとりのない生活をしているのか…。
昨年は私にとって大きな節目の一年でした。四十歳を迎えたこと、新しい挑戦と成功、A Rという商材の飛躍的な浸透、展示会への出展、そして個人的には三人目の娘の誕生、他にも経営者として様々なことを学んだ一年でした。

思い返すと全て支えてくださる多くの仲間やご支援頂いた方のお陰であり、改めて「繋がり」の大切さを感じる一年だったと感じております。

そんな節目の年を越え、今年は世間で言う所の「厄年」のようですが、そんな物は気持ちの問題！ ドンドン前進していきたいと思います。

今年も引き続き「動く印刷」が皆様のお役にたてるようPRしながら、出版事業にも力を入れていきたいと考えております。
皆様にとって「株式会社 飛鳥」が必要な存在、なくてはならないパートナーであり続けるために頑張つてまいります。
本年もよろしくお願い致します。

代表取締役社長 永野 正将



高知県の山間部、四万十川の源流がある旧東津野村（津野町）に祖父母が住んでいます。年末に祖母と一緒に正月飾りの準備をしました。材料は野山、田畑から収穫してゆきます。

お正月のこと

第一収穫場所
自宅から徒歩三分の畑

松・梅・南天「松は緑がきれいながを、梅は高うにのびちよって新芽のあるがを、南天は長めで」形容詞だらけで基準がわかりません…。一つ一つ祖母に確認しながら進めてゆきます。

第二収穫場所

畑から三分の山斜面

樅「細すぎんで、太すぎんで、ちょうど葉っぱがきれいなんで、えい高さのを選んでや」これ？こっちの？ 何度か聞いて祖母のお眼鏡にかなう樅を見つけてゆきます。

裏白「大きすぎんのをとってきて。左右対称のね」幸い裏白はどっさり生えていたので、大ききの塩梅はさておき左右対称のものを剪定鋏でちょんちょん。祖母が満足気だったので合格点ということでしょう。

榊「高うに育つと葉っぱに手が届かんるきね」平地にも榊

は生えているのですが、あえて斜面で高く育った榊に挑みます。榊には古いフコギリの後がいくつあったので、ひよっとした

ら数年置きに剪定を兼ねてお正月飾りになっているのかもしれない。

竹「孟宗竹やないの」祖父母宅の門松は門柱に藁縄で括り付けるシンブルなものなので細めの竹を選びます。ちなみに竹の名前はわかりません…。

帰り道は祖母に裏白を渡し、他の収穫物は私が肩にかついでエンヤコラ。数本ずつとはいえず束になるとずっしりとなりました。毎年欠かさず祖母が一人で準備をしていたのですから有難い重みです。帰宅して飾ろうとしたら「とりだちを飾るがはいかんがよ」とたしなめられました。昔から 決まっちゃゆう そうです。私の予測ですが、植物に

水を吸わせるためかもしれません。収穫時間は一時間程度でしたが、あいまいでわからないことが多く、私の脳内はクエスチョンマークだらけになりました。

千晴
CHIHARU

つては、お正月準備は恒例行事であり日常。お嫁にきてからずっと同じ場所、同じものを収穫してきたので、由来や名前などは気にならないのでしょうか。そういうものなのです。

今の時代、本やインターネットで調べると、由来が明確なものや、歴史的に意味のあるものが情報としてまとめられています。

そういう情報は起承転結があり読み応えもあります。一方で祖母の日常の出来事は理由があるようでなく、あいまいではつきりしないことが多く扱いにくい情報です。でも田舎の生き様や知恵が詰まっているので、田舎に残っている大切な財産だと私は思います。

「はい、写真撮ってや」「これも撮っちゃきや」と、祖母がお正月飾りの写真撮影をしてほしいと言うようになりました。一緒に暮らしていない分、一緒に過ごせる時間は祖父母の日常を記録してゆくのも孫の務めですね。二〇一五年はより一層、祖父母孝行に励んでゆきます。



あすへの歩跡

大澤重人

4

「怪力の龍馬おんちゃん、酒豪でのう……」

一九九五年に高知市海老川市民会館館長として赴任し、地元の若宮八幡宮の祭りで昔話を耳にした。「七五度の酒を一升ごくごく飲んで、言ったとよ。これじゃ、酔じゃって」

まるで民話の世界だ。すぐく面



にしやま・すまこ

高知市生まれ。東京都立大(現・首都大学東京)法学部卒業。ヤクルト販売員などを経て34歳のときに高知市福祉施設の寮母に。社会福祉士の資格を取り、42歳で事務職へ。海老川市民会館館長などを務める。【写真：海老川の聞き取り集を手に「記録のありがたさ」を語る】

白い。翌年、地元のお年寄りから「ちよつと前」の話を聞き取り始めた。歴史的価値がある「ずつと昔」とは違って、「ちよつと前」はないがしろにされ、やがて消えてしまう。「お年寄りは奥ゆかしく、聴きにきてやという人はおらんがですよ」。紹介してもらったお宅を訪ねても「なんちゃあないで」。遠慮されても厚かましくお願いした。生活や仕事、歴史、祭りなど。一つの話を聴くと、さらに聴きたいことができ、別の人に当たる。「人がかく暮らした」という何気ない日常が、予想外に面白い。聞き取りの矢先に亡くなる人もあり、時間との勝負でもあった。

春野町に抜ける山す

身近な記憶を記録して

元高知市一宮市民会館長 西山壽万子さん(66)

そこにある治国谷の鉱山で、戦前戦後に働く人が多かった。なぜか。聴ける人は誰やろ。地区外に転居した元労働者を探し出し、寄稿してもらった。

テープに収めた声は、二〇人強に上った。すべての話が「地域の宝物」だ。文字に起こす。あちこちに飛ぶ話を整理・編集し、九七年三月に一冊にまとめた。「次世代に伝える海老川の暮らし」(二

一六ページ、A4判)。今、高知市民図書館で読むことができる。「自分たちがどこから来て、どこへ行くこうとしているのか」を知る貴重な術だ。

関心は地域だけにとどまらない。一八歳のとき、還暦を過ぎた祖母に「何でもええから原稿用紙に書いて」。その原稿を元に編んだ一代記を一周忌に配った。母が胆管がんを患ったときは、経過をベッドサイドで逐一記録した。闘病記は一代記と併せ、亡くなった後に冊子にして知人らに配った。あれから一五年。すっかり忘れた医者への指示や母の言葉などが、冊子を読むと昨日のこのように思い出せるといふ。「祖母や母が生活

者として、いかにがんばって生きてきたか」。その歩みに共感し、より敬う気持ちが湧いた。

聞き取るだけでなく、大切なのは、それを記録に残すこと。高知市一宮地区で今、「一宮の昔を語る会」が開かれているが、あとから読めるよう記録化を訴える。子どもたちが地域の歴史を知り、先人の苦労や工夫を学ぶ。きつと未来への手がかりになると思う。

書くことは苦にならない。中学三年時に書いた映画『博士の異常な愛情』の感想文が新聞に掲載され、「味を占めた」。高知新聞への投稿も一〇〇本を超えた。詩集も発行した。

ひとつ計画がある。「墓石の代わりに自分の歩みを本に残したい」。二人の娘、特に上京して疎遠になっている次女に読んでもらいたいと願う。即反応のメール時代に、一〇年、二〇年もの長き時間をかけて思いを届ける、未来の娘への母からの「手紙」だ。

おおざわ・しげと

毎日新聞大阪本社工程センター室長。高知支局に支局長、次長として計五年半勤務した。著書に『心に咲いた花―土佐からの手紙』。



キルギスタンからコンニチハ ㊦



うじはら・なみ
高岡郡越知町生まれ。北大でロシア語を学ぶ。2001年からキルギスに在。国立ビシケク人文大学日本語日本文学科学科長。

氏 原 名 美

新 年 所 感

今年は「ヨツコラシヨ」と勢いをつけなければ年が越せなかった。以前は、師走も下旬に入るとその年の反省もそこそこに、さて来年は、と考えたものだが、それも億劫になつてきた。新しい年を迎えたというのに、気持ちはまだ「旧年中」のままで。なんとかしなければ…。

十月に「七十年代から今日までの日本社会の変貌」がテーマの写真展があった。会場は国立美術館二階ホール。国際交流基金と在キルギス大使館が主催する秋の巡回展示会だ。大使館に来場者対象のレクチャーをしてくれないかと頼まれた。作品の解説ではなく時代背景の説明だというので引き受けたが、下見に行つて驚いた。

いかにも現代写真展といった趣で、絵はがきを楽しむようなつもりの人には少々期待はずれの七十六点が飾られている。春の巡回展示は日本人形展で会期を延ばすほど盛況だったそれにひきかえ、今回はあまりに玄人好みの企画だ。

「困っちゃいました。別の展示会を要請してたんです。でも、これじや日本に特別の思い入れとか関心が

ある人しか来てくれないですよねえ」と大使館の文化担当官。二、三日ならまだしも一ヶ月の長丁場、そこで中弛みしないようにと考えたのが会期第二週目のレクチャーなのだから。

何点か六十年代の写真もあった。地下鉄の車両、十歳くらいの女の子が一人、立ち上がつて「次で降りるんだっけ？」と車内放送にでも耳を澄ましているのか。外の景色が見えなくて不安なのだろう。大人の連れはない。間違えないように、と思つても「ここはどこですか」と声に出してきけないのだ。あの頃の子どもは、知らない大人に自分から話しかけることができなかった。少なくとも、私はそうだった。ことばも暮らしも都会と田舎は別世界だったから、大人だつて自分の街を出たら無口だったように思う。

レクチャー当日、一階はエステ企業のイベントでお祭り騒ぎだった。文化担当官が「来場者、きょうは見込みないです」と言う。中央階段前のスペースに大きなパネルを背にした舞台がどんと据えられて、階段がどこにあるのか見当がつかなくなつ

ているのだ。写真展のポスターは外され、美術館は来場者を二階に誘導しようとしれない。結局、レクチャーを聴きにやつてきたのは数人を除いてうちの学生ばかりだった。

予定では、高度成長期から「失われた十年」に至る変遷の中で人口の大都市集中と少子高齢化を取りあげるつもりだったが、学生たちには勉強済みのテーマだ。そこで、予定を変更し「おばあちゃんの昔話」を聞いてもらうことにした。題して「この子が見てきた日本」。あの地下鉄の女の子に自分を重ね「五十年前のきのう、東京オリリンピックが開会しました」と始めた。

写真を見て回りながら一時間半、たっぷり「昔話」を聞いた学生たちが感想を述べてくれた。一人が「僕たちは未来の写真に写ります」と言つた。そして続けて、「この子の時間も続いていきます」と地下鉄の写真指差し、確かめるように私を見た。

あの日を思い出していると、気持ち前を向いてきた。今年も来週から留学試験対策「冬休み特別講座」が始まる。さて、授業の中で今年はどんな「お話」を聞いてもらおうか…。

おのころじま 大奮

ふんせんき

田島征彦

3. へこすいオヤジ

周吾が住んでいる奈良の生駒から、自分の作品と一緒に、明石大橋を渡って、淡路島のぼくの家で、ぼくの作品を積み、高速道路を高知まで走ってくれる。ほんとは、息子を利用する、へこすい父親の虫の良いタクラミだったのだが。

高知の観客は、見慣れたぼくの作品よりも周吾の絵に引きつけられたようだった。

今年あたりから、百貨店の外商部の活躍もあり、周吾の絵が突然売れ始めた。なにしろ、細かく丁寧に描く絵だから、小さな作品でも随分と時間がかる。次つぎと注文がきて、三年先まで詰ってしまったと言う。そんな息子の様子に、親子展のことは言い出し難くなってしまった。

今井誠志さんは、美大染織科の後輩である。

彼との付き合いは長い。彼が入学してきた時、ぼくは本科を卒業して専攻科（現大学院）へ残った。ぼくの制作室へ物珍らしそうに、入ってきた新入生の彼と妙に気が合ったのか、

親しくなり、五十年余りの付き合いになった。いつも、作品の運搬など甘えっぱなしだ。高知県立美術館で、征三と兄弟展を開いた時も、ぼくの染めた大きな布を、美術館のテラスから、中池へ垂らしたインスタレーションも、今井さんが中心になって構成してくれた。そんなに助けてもらい

ながら、彼とは二人で展覧会を開いたことがない。そうだ！ 今井さんと二人展にしよう。今井さんの作品は織物を使った造形作品だが、他の織物作家が考えないような、独特な手法とセンスで、今、注目されている作家である。高知での初めての発表となるので、代表作（アクリルのタイソウな額にはいつて、減法重たい！）を運送屋を雇って運んで来た。ひとつの作品を、とても一人では持ちあげられない。京都の大学で長年、教えてきた今井さんに、熱烈なファンの教え子が、助けにきてくれた。中年の頼りになる美しい女性が二人、土佐のハチキンゼよ！ たまるか。建設業を営む彼女らの力は、二人の老人作者の作品を見事に展示してくれた。

展示が終ったあとの宴の盛り上がりは、想像を超えるものであったが。



たじま・ゆきひこ（染色家・絵本作家）
大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。
京都市立美術大学染色図案科専攻科修了。
1978年『じごくのそうべえ』で第1回絵本に
っぽん賞。最新作は『ふしぎなともだち』。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

高知を離れてから、五十五年以上になる。この間、毎年のように帰って来ては展覧会を開いてきた。双生児兄弟の征三との兄弟展も何度かしたが、個展が多かった。

二〇〇一年に淡路島へ引越してからは、息子の周吾との親子展を、横内の星ヶ岡アートヴィレッジで開くことになった。

周吾は、京都の山奥の小さな村で自給自足の生活を始めたころ生れた。京都造形芸術大学の日本画科を卒業して、へんてこな（個性的な）日本画を描いている。少しずつ評価され始め、素朴で丁寧に描かれたファンタジックな世界に魅せられるファンも増えている。

そんな自慢の息子の作品を、高知の人たちに見てもらいたくて、親子展を考えたのだった。

使いこなすと楽しくなる オノマトペ



みずき・わか
高知市在住。フリーライター、
生涯学習コーディネーター。
文章教室や漫画の原作教室な
ど高知市を中心に開催している。

水木和香

風が吹く時の表現でも、「ヒュー」と「ピュー」と。「ピュー」と「ピュー」とでは、それぞれ受け取る感じが違います。「ピュー」は「ビュー」よりも軽い感じがしますし、「ピュー」よりも「ビュー」のほうが強い感じですね。温度さ、えも違って感じられます。

このように実際の物音をまねたり、印象を表現した修飾語が、「オノマトペ（フランス語）または「オノマトペア（英語）」といわれるものです。日本語では総称して擬声語と言ったり、擬音語・擬態語というふうに分けて説明されたりします。一般的にはカタカナで書き表わされることが多いようです。この分野では金田一春彦氏による研究（一九七八年「擬音語・擬態語概説」）がよく知られています。それぞれの事例も合わせて挙げておきました。同じ音節や単語を繰り返す畳語（じようご）が多いようです。



- ・人間や動物の声を表す「擬声語」
例：ニャアニャア・コケコッコ
- ・自然界の音や物音を表す「擬音語」
例：ガチャン・ザアザア・どんどん
- ・無生物の動きや様子を表す「擬態語」
例：ガラガラ・どんより・ぼうつと
- ・生物の動きや様子を表す「擬容語」
例：のろのろ・バタバタ・ふらつと
- ・人の心理状態や痛みなどの感覚を表す「擬情語」
例：イライラ・ズキズキ

幸いなことに擬音語は、初めて聞いたとしても、およそ何を表しているかが分かります。上手に使用えば、スムーズに状態を伝える気の利いた表現になりますし、文章自体にリズムや変化を与えたりすることも出来ます。擬音語の多さは日本語の特徴の一つと言えます。使い過ぎると子どもっぽくなるという欠点もありますが、どう表現するかで筆者の個性や感性を、読者に印象付けることができます。

第18回 日本自費出版文化賞 作品募集

■応募資格

制作費用の全額または一部を著者（個人・団体）が負担し、日本国内で2004年以降に出版され、主として日本語で書かれた一般書（※で、製本された著書が対象。著者の国籍は不問。※一般書とは、一般の人が理解できる内容の著書を指す）

■募集部門

●地域文化部門 ●個人誌部門 ●小説部門 ●エッセー部門 ●詩歌部門 ●研究・評論部門 ●グラフィック部門

■受付期間

受付中 2015年3月31日（当日消印有効）

■申込先（ホームページもご覧ください）

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町7-16 ニッケイビル7階

（社）日本グラフィックサービス工業会内
NPO法人日本自費出版ネットワーク
日本自費出版文化賞事務局

■発表

2015年9月上旬

朝日新聞紙上などで発表

■賞金、賞品

【大賞】賞状ならびに賞金20万円
以下【部門賞】【特別賞ほか】【入選】

（以上募集案内より抜粋）

その他詳細は「自費出版ホームページ」（<http://www.jsjapan.net/>）をご覧ください。

反戦青年の死

馴田 正満

あることを調べていると、まるで故人の意志が働いたかのように新しい発見をすることがあります。

『ダッタン海峡』10号の編集のときもそうでした。編集で苦労したのが、巻末の戦前の高知県における共産主義運動についての確認事項と年表部分の補完でした。当時活動した人たちは当然のことながら生存していないので、残された数少ない資料を探していくしかありません。

年表のなかに、昭和三年十一月に旧制高知高等学校の学生が吾川郡長浜町(現・高知市)でマルクス主義経済研究会を開き、光内ほかの青年が参加したとありました。光内とは光内重久のことです。高知での昭和五年の第一次共産党事件で検挙されました。その後上京して、当時もつと戦闘的な労働組合の全国組織であった全協(日本労働組合全国協議会)で活動していました。

たが召集され、昭和十三年に上海付近の羅店鎮で戦死しました。

調べると、高知市朝倉にあった陸軍歩兵第四十四連隊が揚子江の川沙河口近くに敵前上陸したのが八月二十三日、彼が戦死したのは二十七日。つまり上陸五日目のことでした。戦史はこの日の戦闘を、羅店鎮東南側の大堤防の線に進出中、敵砲兵の集中攻撃を受け、この集中射撃による中隊の損害は大きかった、と述べています。

長浜町にとってはアジア・太平洋戦争が始まって初めての(つまり日露戦争以来の)、戦死者になります。高知市では盛大な市葬が執り行われているので、長浜町でも町を挙げての葬儀が行われたことでしょう。戦争反対の立場にいた彼が、戦場に引き出されて早々に殺された事実には深い怒りがこみ上げました。

そんなある日、御畳瀬・種崎間の渡船の時間まで余裕があったの

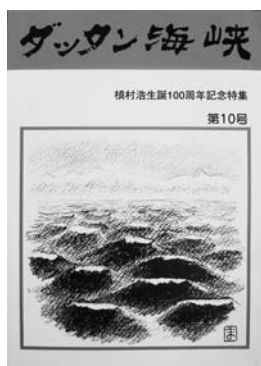
で雪隠寺に参拝し、何気なく西隣の忠魂墓地まで行ってみました。

墓地の奥に石碑があり、近づいて読むと「日支事変大東亜戦争殉国烈士之碑」と刻まれ、三百二十六名の筆頭に何と「光内重久」とあるのです。戦没年月日の順に氏名を彫ったのでしよう。それにしても、死後 殉国烈士 に祀り上げられた彼の魂は、果たして静かに安んじていることでしょうか。

戦前、高知の若者は、深夜に銃殺覚悟で朝倉の兵営に忍び込み、反戦ビラを撒きました。ですが、いったん戦争が起きると、戦争に反対した者もしなかった者も、押



殉国烈士之碑の筆頭に彼の氏名が刻まれている



ダッタン海峡 第10号

横村浩生誕一〇〇周年記念特集

前号の発行から10年の時を経て上梓された。言葉の力で反戦を訴え続けた高知の若き詩人・横村浩に魅せられた人々、総勢23名による随筆集。

A5判 116頁 定価 1,000円＋税

発行・編集 平和資料館 草の家
〒780-0861 高知市升形 9-11
電話 (088) 875-1275

お問い合わせは上記連絡先までお願いいたします

しなべて戦場へ駆り出されたのです。そしていま、日本は「戦争ができる国」へと動いています。光内重久たちの時代と違って、今は戦争反対の声を上げることができます。絶対に戦争への道を阻止しようという決意を新たにすることでした。

なれた・まさみつ

『ダッタン海峡』編集長。高知市在住。

催し物案内板

〈1月～4月〉

企画展 “龍馬”を生きた4代目 坂本直道 展

と き 開催中～3月31日(火)

9:00～17:00 (※会期中休館日なし)

ところ 高知県立坂本龍馬記念館

入場料 大人(18歳以上) 500円 (20名以上団体 400円)
高校生以下、高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被曝者健康手帳所持者とその介護者1名は無料

企画展 安田町・高知県立坂本龍馬記念館 連携企画 第13弾

現代龍馬学会第2・3回パネル展より

「龍馬のように！」

と き 2月7日(土)～5月12日(火) ※水曜休館

9:00～17:00

ところ 安田まちなみ交流館・和

入館料 無料

土方 佐代香 展

と き 2月10日(火)～3月22日(日)

※毎週月曜休館 (月曜祝日の場合は翌日)

9:00～17:00

(入館は16:30まで※最終日は15:00まで)

ところ 奥物部美術館

入場料 一般200 (100) 円・()内20名以上団体料金

長寿手帳提示半額、障害者手帳提示無料、高校生以下無料

お問い合わせ先

香美市立美術館

TEL 0887-53-5110

e-mail bijyutsukan@city.kami.lg.jp

布が咲くー草木染の物作りー

と き 2月11日(水・祝)～3月29日(日) ※月曜定休

9:00～17:00 (入館は16:30まで)

ところ 越知町立横倉山自然の森博物館

入館料 大人500円、高校・大学400円、小・中学生200円
(20名以上の各団体は100円引き)

関連イベント

染色教室 ー絹のストールを染めるー

3月15日(日) 13:30～15:30

参加費 1,500円 (材料費込) / 定員15名

高知学芸中学高等学校コーラス部

第20回 定期演奏会

と き 2月14日(土)

開場17:20 / 開演18:00

ところ 高知県民文化ホール(オレンジホール)

入場料 一般 1,000円 / 学生(中学生) 500円

第64回 桜雲書道会百人展

と き 3月31日(火)～4月5日(日)

9:00～17:00 (最終日は16:00まで)

ところ 高知県立美術館 県民ギャラリー

あなたのご寄稿を
お待ちしております

二〇一五年夏、終戦から七〇年を迎えます。大きな節目を前に私たちに何ができるでしょうか。悲惨な歴史を繰り返さないために、過去の真実を語り継がなければなりません。あなたの戦争の記憶をお寄せください。歴史の大綱に残されていない、戦中の日々の小さな出来事で構いません。

〒780-1094

高知市本宮町65-6 飛鳥出版室宛

電話 0888-8550・0588

メール info@asuka-net.jp

(件名に「かわら版係」と明記してください)

お寄せいただいた文章は、二〇一五年夏発行(187号)に掲載予定です。

◆前号訂正

前号掲載の「はちきんのハンガーストライキ」の中で誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

上段・一行目

海軍航空省・海軍航空廠

あすかの往來から

昨年11月に開催された2つのイベント「第3回ものづくり総合技術展 NEXT」「高知自費出版フェア」は、おかげさまで盛況のうちに終了いたしました。ご来場いただきました皆様、誠にありがとうございました。当日の様子をご報告いたします！

ものづくり 総合技術展

2014.11.20～22
於 高知すばせんセンター

高知県内で、ものづくりに携わっている企業・団体が一堂に会し、自分たちの技術や製品をPRする場。来場者は老若男女様々で、毎日大盛況！

私たちにとっては初めてのイベント参加・ブース出展で、準備段階から手さぐりの部分もありました。不安と期待を胸に当日を迎えましたが、本当にたくさんの方にお立ち寄りいただき、3日間はあっという間に過ぎました。

「AR」を皆さんに知っていただく機会になったと同時に、私たちにとっても、新たな糸口や改善点に気がつくきっかけとなり、とても有意義な3日間でした。

イベントで得たたくさんのヒントを元に、さらに力を入れて飛鳥の「動く印刷」をアピールしていきます！



高知 自費出版フェア

2014.11.22
於 高新文化ホール



2014年11月22日土曜日、高知市の印刷会社8社の共催で「自費出版フェア」が高新文化ホールで開かれました。

講師は文藝春秋各誌の編集長などを務められ、これまでに1,000冊以上の単行本・雑誌を作られた高橋一清さん。

本が出来上がるまでの裏話など（文章の書き方、読みやすい印刷、装丁の手法）を紹介いただきました。また新井満さんの知られざる逸話なども聞かせて頂き、面白かったです。



いつか見た「宝くじに
当選した夢」は目覚めた時に
得たような損したような、
そんな夢でした！
今年こそ実現！！(正)

暗闇を巨大なパステル色の
動物ビスケットが行進する夢。
これが怖かった幼い日の私。
以来、夢は常に色鮮やか。
(嶋)

ジェットコースターに
乗る夢を見ました。
眼鏡が飛ばないように外して乗る
という妙に現実的な夢でした。
(平)

今年は初夢を見なかったので、
昨年よく見た夢。運転中ぶつかる夢。
実際、ぶつかったことはない。
今年も安全運転で。(西)

初夢は……思い出したくない。
ものすごく高いビルだったのか、
断崖絶壁の山の頂きだったのか、
その端っこにブルブル震えながらたって
飛び込まないといけない
という危ないものだった。(中)

幼い頃から度々見るのは、
トイレや洗面台から水が溢れ出し、
溢れ続ける水に流される夢。
何を暗示しているのやら…
(上)

今年の初夢は、朝出勤をして、
仕事をこなすようなものでした。
ごく日常的な夢だなと思いました。
(武)

夢を見ているであろうが
覚えていない。
「夢の60尾長」の夢
でも見たいものだ！
(黒)

新春*スタッフ総参加雑書き

あなたの見た夢エ～ 教えてちょうだい！

ひっじを数えた先にある夢の世界はどんなもの？
2015年の初夢や昔見た忘れられない夢を
ちょっと教えてもらいました

小さい頃、空を飛ぶ夢
をよく見ていた。気が付けば
飛ぶ鳥という会社で
働いていた。夢が叶った
のでしょうか？(川)

羊年なのに…
初夢は2頭の猪を見かけて
慌てている私。
目が覚めると隣に2人の孫。
今年も元気をもらいます。
(浜)

自転車で家に帰るのに、
行っても家に着く事ができなかった。
目が覚めた時に、人生には
近道はないと思った。(垣)

よく寝ながら車を
運転する夢を見ます。
寝てはだめだと焦る一方
車はどんどん進むので
とても怖いです。(谷)

雪が降っている夢を見ました。
もしかしたら前日にチラチラ雪が
降ったせいかもしれません。
(安)

年の初めから、意味なく
女性に頬を叩かれる夢を見ました。
今年一年が少し不安に
思った朝でした。(前)

初夢 今年は
あまり良くなかったなあ。
夢のことは気にせず今年も
平和な一年でありますように
＼(^o^)/ (美)

普段は熟睡どころか爆睡の
私は夢を殆どみません。
4年前に逝ってしまった夫が
夢でもいいから出てきてほしい
と思うこの頃です。(雅)

記憶に残っている夢は
特にありませんが、自分が学生だった
ころにもどった夢は
今でもけっこう見ます。(中)

わが家の太郎

散歩コース

永野 雅子

今冬は寒さが厳しくて、特に朝の散歩の時間は霜が降りていたり氷が張っていて早々に帰る日が続いた。

夕方五時には暗くなるものだから、「散歩はグメンね」となる。

太郎の散歩には、「フルコース」「ショートコース」「超ショートコース」とあって、私の都合で決められる。

「太郎ちゃん、今日は急いでいるから超ショートコースよ」などと言いながら一回り。

「今日は仕事は休み、天気もいいし、フルコースで行こうかね」と、公園まで足を延ばして丘の上や運動場のまわりを一周。太郎もあちこち寄り道をしながらご機嫌。

ところがこのコース、太郎は私の様子と、時間帯でちゃんとわかっていて、自分からその方角に進路を向ける。我が家を出て左はフルコース、右はショートコース、

彼は夕方には必ず右方向に行くのである。

夫がよく「お母さん、太郎は賢い。俺が『今日はくるりん（近所を一回りするだけ）』

ぞ」と言ったら太郎は角をクルリと回ったところでちゃんと帰ろうとする」と話していたけれど、本当にその通り、どうして判るのだろうかと思うほど。



あるがやき

先日のこと、帰宅すると外はもう真っ暗だったけれど、朝も超ショートコースだったから少し連れで行ってやろうと出かけた。

二十分程の散歩が終わって、大急ぎで食事の支度や雑用を済ませ、携帯電話のことをすっかり忘れて就寝。

翌朝、「あれ？ 携帯がない」と、あちこち捜すが見当たらない。「どこに置いたろう。掛けてみよう」

メガネなしで、自宅の電話から自分の番号を打つ。

「ルルル、ルルル」発信音は鳴るが着信音はどこからも聞こえてこない。

「困った、どこへ忘れたろう。会社か、スーパーか」

などと考えていると、

「もしもし」と男性の声、もうびつくり！

「あ、すみません。間違えました。申し訳ありません」

大急ぎで切った後、改めてメガネをかけ、今度は慎重に自分の番号を確かめながら打つ。

「ルルル、ルルル」

大きな着信音が鳴っている。行ってみると、太郎の散歩用バッグの中。

昨夜の散歩から帰ってそのまま忘れたのだ。

時はまさに午前五時四十分。

どちら様か存じませんが、早朝から間違い電話などおかけして、本当に申し訳ありません。ごめんなさい。

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役

無料アプリ「COCOAR2」をダウンロードして画像にかざし、「動く印刷」を体感しよう！

動く印刷！

話題のARで
情報を飛躍的に拡充！

※「COCOAR」ではなく必ず「COCOAR2」をダウンロードしてください。※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかったり、正常に動作しない場合があります。※詳細は弊社ホームページ（<http://www.asuka-net.jp>）よりご確認ください。



ここからダウンロードできます

